

結婚における性生活の役割
—性生活満足度の規定要因と帰結に関する実証分析から—

木村裕貴（東京大学大学院）

1. 背景と目的

日本の家族社会学的研究では、性生活に着目した研究が皆無である。その一因には、きわめてプライベートな事象を調査することの困難があるだろう。加えて、一見生物学的性差に基づく個人的な行為であるため社会学的研究の対象になりにくかったのかもしれない。

だが、性生活に着目することは、夫婦関係を扱ってきた家族社会学にとって意義ある知見をもたらすと期待される。なぜなら、性生活は既婚者にとって結婚の重要な一要素であり (Greenblat 1983)、夫婦は性生活をめぐる対立とそれを解消するための感情労働を経験するためである (Elliott & Umberson 2008)。実際、米国では以前から、性生活は夫婦関係を捉えるうえで戦略的に有効な視角であることが指摘されてきた (Call et al. 1995)。

そこで本研究では、調査が比較的容易な性生活満足度を手がかりにして、以下2つの分析課題を検証する。第一に、性生活満足度と結婚全体満足度はいかに相互関連しているのかである (分析1)。ここでは因果順序や個人間相互影響を考慮して分析する。第二に、性生活満足度の規定要因は何かである (分析2)。主に米国で展開されている先行研究から、夫婦の家事分担、労働時間、経済状況に関する仮説をまとめ検証する。以上2つの分析を通じて、若年夫婦の結婚における性生活の役割を検討することが本研究のねらいである。

2. 方法

データは、東大社研・高卒パネルの wave15–17 (2018–2020 年実施) のデータと、高卒パネル対象者の配偶者に対して同時期に実施した「結婚と日常生活に関するアンケート」(配偶者調査) のデータを合併した夫婦ペアパネルデータを用いる。分析には、cross-lagged モデル (SEM) (分析1) と階層線形モデル (分析2) を用いる。

3. 分析結果

分析1の結果、夫性生活満足度が妻結婚全体満足度を介して、夫結婚全体満足度および妻性生活満足度に影響することが示された。つまり、夫の性生活満足度が夫婦関係の起点として機能しており、夫の性生活満足度の規定要因を明らかにすることが特に重要であるといえる。つづく分析2の結果、妻の就業が夫の性生活満足度に負の影響を及ぼすことが示された。一方、夫の結婚生活満足度に対する妻の就業の効果はみられなかった。

これらの結果は、若年夫婦の結婚生活において、性生活が夫婦内性別分業と夫婦関係を結ぶ役割を果たしていることを示唆する。性別分業をめぐる交渉や対立は、性生活を介して、あるいは性生活に象徴的に現れる形で、夫婦関係に影響しており、その意味において性生活は社会学的研究の対象になりうる。

付記

本研究は、JSPS 科研費 JP16H03778, JP18K02024 の助成を受けたものである。東大社研高卒パネル調査データの使用にあたっては、高卒パネル調査企画委員会の許可を受けた。

文献

- Call, Vaughn, Susan Sprecher & Pepper Schwartz, 1995, "The Incidence and Frequency of Marital Sex in a National Sample," *Journal of Marriage and the Family*, 57(3): 639–52.
- Elliott, Sinikka & Debra Umberson, 2008, "The Performance of Desire: Gender and Sexual Negotiation in Long-Term Marriages," *Journal of Marriage and Family*, 70(2): 391–406.
- Greenblat, Cathy Stein, 1983, "The Salience of Sexuality in the Early Years of Marriage," *Journal of Marriage and the Family*, 45(2): 289–99.

(キーワード：性生活、夫婦関係、夫婦ペアパネルデータ)